京都秋期福音特別集会（２）

# パウロ的実存の秘密ω

## ――ガラテヤ書第２、３、５、６章――

１９８９年10月29日（京都）
小池辰雄

パウロの回身　キリストの信　相互内住関係　信行一如　火山人　イエスの中に在る信によって　クリスチャンの自由　聖霊なる自由　聖国は来ている　信愛一如　信仰は愛に動かざるを得ない　宇宙を翔け回るような魂　円還関係　イエスの印

【ガラテヤ２】

4 これ私かに入りたる偽兄弟あるに因りてなり。彼らの忍び入りたるは、我らがキリスト・イエスに在りて有てる自由を窺い、且われらを奴隷とせん為なり。5 然れど福音の真理の汝らの中に留らんために、我ら一時も彼らに譲り従わざりき。……

8 （ペテロに能力を与えて割礼ある者の使徒となし給いし者は、我にも異邦人のために能力を与え給えり）……

15 我らは生来のユダヤ人にして罪人なる異邦人にあらざれども、……

20 我れキリストと偕に十字架せられたり。最早われ生くるにあらず、キリスト我が内にありて生き給うなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給いし神の子を信ずるに由りて生くるなり 21 我は神の恩恵を空しくせず、もし義とせらるること律法に由らば、キリストの死に給えるは徒然なり。

【ガラテヤ３】

1 愚かなる哉、ガラテヤ人よ、十字架につけられたまいしままなるイエス・キリスト、汝らの眼前に顕されたるに、誰が汝らを誑かししぞ。2 我は汝等より唯この事を聞かんと欲す。汝らが御霊を受けしは律法の行為に由るか、聴きて信じたるに由るか。3 汝らは斯くも愚なるか、御霊によりて始まりしに、今肉によりて全うせらるるか。4 斯程まで多くの苦難を受けしことは徒然なるか、徒然にはあるまじ。5 然らば汝らに御霊を賜いて汝らの中に能力ある業を行い給えるは、律法の行為に由るか、聴きて信ずるに由るか。6 録して『アブラハム神を信じ、その信仰を義とせられたり』とあるが如し。……

10 されど凡て律法の行為による者は詛の下にあり。録して『律法の書に記さ

**れたる凡ての事を常に行わぬ者はみな詛わるべし』とあればなり。11律法に由りて神の前に義とせらるる事なきは明らかなり。『義人は信仰によりて生くべし』とあればなり。……**

**14これアブラハムの受けたる祝福のイエス・キリストによりて異邦人におよび、且われらが信仰に由りて約束の御霊を受けん為なり。……**

**26汝らは信仰によりキリスト・イエスに在りて、みな神の子たり。……**

**【ガラテヤ５】**

**1キリストは自由を得させん為に我らを釈き放ちたまえり。然れば堅く立ちて再び奴隷の軛に繋がるな。……**

**5我らは御霊により、信仰によりて希望をいだき、義とせらるることを待てるなり。6キリスト・イエスに在りては割礼を受くるも割礼を受けぬも益なく、ただ愛に由りてはたらく信仰のみ益あり。……**

**14それ律法の全体は『おのれの如く、なんじの隣りを愛すべし』との一言にて全うせらるるなり。15心せよ、もし互いに咬み食わば相共に亡されん。……**

**【ガラテヤ６】**

**3人もし有ること無くして自ら有りとせば、是みずから欺くなり。……**

**8己が肉のために播く者は肉によりて滅亡を刈りとり、御霊のために播く者は御霊によりて永遠の生命を刈りとらん。……**

**16此の法に循いて歩む凡ての者の上に、神のイスラエルの上に、平安と憐憫あれ。**

**17今よりのち誰も我を煩わすな、我はイエスの印を身に佩びたるなり。……**

## ●パウロの回身

パウロは――もとサウロですね――小アジア半島のキルキヤのタルソに生まれた。自分はベニヤミンの族の生粋のユダヤ人であると、彼の書簡の中にも出てますが、ヘブライ語とギリシャ語が両方とも自由に使える。タルソはその当時のギリシャ文化の――アレキサンドリア、アテネそれからこのタルソと――中心的な所だった。そういう所に育った、いわゆる当時の文化人でもあるし、それから生粋のパリサイ派のユダヤ人であった。その当時の世界の大事な要素を身に付けていた。しかしながら、どっちも大事なんだけれども、桁違いな大事なものが現れているということをパウロは知らなかった。

キリストという桁違いな人が現れた。パウロは地上では、直接には肉のキリストを知らないですよ、聞いてはいたけれども。ところが、はっきり、幻じゃない、甦りのキリスト

が現れた。そして、これにダマスコ途上でひっくり返された。よく「パウロの回心」と言うが、「回心」という言葉は、心がめぐるだけじゃダメなんです。パウロは「回身」なんです、身体がひっくり返された。全存在的な身体、それがひっくり返された。哲学の世界でカントが大転回をした。自然科学の世界ではコペルニクスです。コペルニクスが、

「地球が動かないで太陽が動いていると思ったが逆だった、太陽の回りを地球が回っていたんだ」

と。これがコペルニクス的な転向という。ひっくり返りです。パウロが正にコペルニクス的なひっくり返りをキリストにさせられた。完全に受身です。思いもよらなかった。いきりたっていたんだからね、彼は。モーセの十誡、それから、いろんな誡命が361あるんですが、それを大いに覚えかつまたそれを一生懸命で拳々服膺していたわけだ。それで自分は義人だと思っていた。「律法の義」というのがそのことです。これはとんでもない。神さまぬきの、いきりたっているような自己義認は大間違いだということを、キリストにはっきり撃たれて、それでひっくり返された。

「15 **我らは生来のユダヤ人にして罪人なる異邦人にあらざれども、**」（**ガラテヤ2・15**）

と。「罪人なる異邦人」というのは、律法を知らないのを「罪びと」としてるんだ、このユダヤ教の連中は。それくらい頑ななんだ。パウロもそうだった。そのパウロがひっくり返されたら、今度は異邦人に、罪びとなる異邦人に伝道を命ぜられた。とうとう小アジア半島からギリシャに向かって行った。最初に回心したのは例のルデヤという女性です。

彼はやっぱり律法主義者だった（ガラテヤ1・14）。キリスト者を迫害していた（ピリピ3・6）。パウロはそういう意味で、ユダヤ教の狂信者だ（ガラテヤ1・13）。そういった熱烈なご連中の一人であった。だから、異端に対する烈しい憎悪を持っていた。キリストを異端だとしていた。けれども、今度はパウロ自身がユダヤ教の異端になるわけです。

「キリストは本当のメシヤだ」

と、ペテロやヨハネあたりが先ず、エルサレムの正統派の本山の人たちから始まった。そうすると、それに対して、またユダヤ教の連中がゴタゴタ始めるという、そういう宗教的な争いの中にいたわけです。そのユダヤ教の筆頭のチャンピョンがサウロ（回心前のパウロ）だった。

ペテロたちは、ナゼレのイエス、十字架されたイエスこそはメシヤであるということに初めて気がついた。これは、ペンテコステを通ってからですよ。

「祈って待っていろ」

と。そしたら、ペンテコステを通って聖霊が臨んだ。第十巻の最初の扉にグレコの聖霊降臨の絵が出ているでしょ。あの通りのことが起きたわけです。

パウロは身をひっくり返された。キリストに撃たれた。使徒行伝9章、22章、26章。こ

れが決定的なパウロの転向であります。

## ●キリストの信

ガラテヤ書3章10～11節、

「10**されど凡(すべ)て律法(おきて)の行為による者は詛(のろい)の下にあり。録(しる)して『律法の書(ふみ)に記されたる凡ての事を常に行わぬ者はみな詛(のろ)わるべし』とあればなり。11律法に由りて神の前に義とせらるる事なきは明らかなり。『義人は信仰によりて生くべし』とあればなり。」（ガラテヤ３・10～11）**

パウロは回身してからはっきりその事が分かったから、自分は律法の行為で義人だと思っていたところが、とんでもない、「詛われ」だと。ユダヤ人は、

「十字架に懸けられた者は、木に懸けられた者は詛われたものだ」

と――これは申命記の中にありますが――キリストのことをメシヤどころじゃない、

「あれは詛われた人間だ」

と言ってたわけです。

けれども、実は、律法は人間を縛ってしまう。本当は活かすはずのものが逆に縛ってしまう。それだから、

「律法に殺された」

と、パウロがガラテヤ書2章19節で言っている。

**「神の前に義とせらるる事なきは明かなり『義人は信仰によりて生くべし』と」**

この、

**「義人は信仰によりて生くべし」**

という言葉は、ハバクク書の2章4節から来ているんですが、第十巻（『聖書は大ドラマである』）の203頁の「5月28日 義人生信」の所に書いてありますので、ちょっとご参考に言っておきます。大事なことが書いてある。

**「見よ、彼の魂は驕(おご)りて直からず、その衷(うち)は義に非ず。されど義人はその信に在りて生く。」（ハバクク２・４）**

「エホバ神はハバククに命じて板に明記せよ、と。その天来の啓示は、右の一句であった。これが観望塔で天を仰いで聴き且つ観た文字であった。

前段は即ちカルデヤが野獣の如く強く驕って、神に対して直き関係にない。衷なる心は不信不義である。バビロン（カルデヤ）を以てサタン的な魂の相の代名詞としているのは黙示録である。暴虐と淫乱は人類の歴史の暗黒面である。

後段は、「されど義人はその信に在りて生く」。原語では僅(わず)か三語。それで漢文調で義人生信と表現した。信仰に在って生きている者が義人であって、義人はむしろ述語である。そのような義人の祖はアブラハムであった（創15・6）。大預言者イザヤが正に

かかる信仰の唱道者にして身証者であった（イザヤ7・9、28・16、30・15）。そして新約のパウロが正にこのハバククの言を大きくとりあげた（ロマ1・17、特にガラテヤ書3章）。ギリシャ語七十人訳では「義人はわが信実（ピスティス）によりて生く」とある。即ち神の本願の言で、神の不変の信実（エムーナー）を体受、信受して生きる者が義人だというのである。本願に裏づけられてこそ、人間の側の信が本ものとなる。本願の正信の主体たる全キリストを全存在で体受して生きるのが本当の信仰者で、義人である。」

パウロは七十人訳のギリシャ語の聖書を読んでいた。

**「義人はわが信実（ピスティス）によりて生く」**

と書いてある。この「信実」「エメッ」という字は「アーメン」という字から来ている。

「私の信実によって生きる者は義人だ」

というんです、ハバクク書のもとは。

「神さまの、裏切らないところの神さまにおいて生きるのが本当の義人だ」

と。こっちの信仰じゃない。「キリストの信」です。信を聴くことによってと。聞いて信ずるのではなくて、

「キリストの信を聴き入れることによって、それで聖霊を受けたか」

と、こういうわけです。我々の信仰なんてものはあてにならないですから、そんなものは。信仰すら私してはダメですよ。「絶信の信」といっているのはそのことで、「絶信の信」の信は「キリストの信」です。

「自分の信には絶してキリストの信を受けとれ。これくらい本当のことはないんだから」

と。もぅ、圧倒されちゃうんだ。私は語りながら異言が出そうになって困る。私は説明しているんじゃないですよ、あなた方に。告白しているんです。

「我が信を受ける者は義人であって、それは本当に生きるぞ」

と。これが、

**「義人は信仰によりて生くべし」**

ということです。パウロさんはそれを少し、こっち側のことにしちゃったけれども、本当は向こう側のことなんだ。

## ●相互内住関係

これも、一般のキリスト教に対してコペルニクス的転換をしてもらわなければダメなんだ。太陽は、あるところに向かって太陽自身も走っているけれども、とにかく地球は太陽の回りをグルグル回転させられている。完全に受け身でしょ。この距離がもう少し近ければ、地球はダメ、もっと遠くてもダメ、そういう素晴らしい距離においてひっぱり回されて、そして生きとし生ける者は生かされている。太陽は地球の絶対的な主体なんです。太陽を

国旗にしている日本人が、この国旗をその角度から重んじないとは何事かと私は言いたい。軍国主義でも何でもない。

「心に太陽を持て」

と、ドイツの詩にもある。その太陽を自分の中に入れろと。

「たとえ嵐があろうと、雪が降ろうと、心に太陽を持て。空が曇ろうと、地上がいろいろな争いでゴタゴタになろうと、心に太陽を持て。何でも来るなら来てみろ。まっ暗な日でも、この光はお前に照ってくれる。」

と。聖霊はうちなるキリストです。キリストを宿さなくては。

「我に宿れ、宿れ」

という。

「我に宿れ」

「あなたは私の中に入ってください」

という、相互内住関係です。ヨハネ伝の15章も同じことだ。切っても切れない関係です。キリストがちゃんと言っているんだから、

**「私は葡萄の樹、お前たちは枝だ。枝が幹から離れたらどうなるんだ」**

と。それが信の現実なんです。全く現実なんです。「信仰」なんていう言葉は躓きになって困るね、「信じ仰ぐ」なんて。「信仰」の「仰」の字は要らないよ。始めは仰いでいたっていいよ、始めは。これは第一段階。キリストの中へ行きましょう、と。これは「信行」。信じ行きましょう、そうしたらキリストとの交わりへ入ります。「信交」、これは内在関係の世界です。漢字というものは面白いもんだね。

あなた方、空気を思って生きていますか。

「我思うゆえに我あり」

「我空気を思うゆえに我あり」

と言ってますか、誰か。冗談じゃない。空気に囲まれ、空気を吸って、我々の肉体は生きている。肉体にとって絶対に不可欠なるものは、この気なんです、空気なんです、大気なんです。我々の魂に絶対に不可欠なのはキリストの気なんです。霊気なんです。

## ●信行一如

**「4これ私かに入りたる偽兄弟あるに因りてなり。彼らの忍び入りたるは、我らがキリスト・イエスに在りて有てる自由を窺い、且われらを奴隷とせん為なり。」（ガラテヤ2・4）**

偽兄弟が入ってきてガラテヤの諸教会をかき乱し、また律法の奴隷にしようと思っていると。一般的な意味における「自由」というのは、奴隷でない、市民権を持っている者を「自由」という。ローマの市民権を持っているのは自由なんです。キリストに在って本当の自由を

持っている者、これをまた律法の奴隷にしようと思っているのはとんでもないはなしだと。

「[5]**然れど福音の真理（まこと）の汝らの中に留（とどま）らんために、我ら一時も彼らに譲り従わざりき。**」（ガラテヤ２・５）

「[8]**（ペテロに能力（ちから）を与えて割礼ある者の使徒となし給いし者は、我にも異邦人のために能力を与え給えり）**」（ガラテヤ２・８）

大事な言葉だね、これは。

「**ペテロに能力を与えて**」

という。これは聖霊の力ですよ。「割礼ある者」とはユダヤ人のこと。パウロだってもちろん割礼を受けている。今でいうと、いわゆる「洗礼」を受けているということ。

無教会は、

「形式的な洗礼、聖餐（せいさん）なんかしたってしょうがない。ただ信仰のみだ」

と言って、内村先生はつっ走りだした。内村先生自身は雨の中へ入っていって自分で洗礼を受けた。おもしろい人だ。パンをかじって、これは聖餐だと。なかなか自由な魂です。

「ペテロはユダヤ人の使徒だ。自分は異邦人のための使徒だ」

と。これはキリストに遣わされたお使いということです。正にその文字の通りです。だから、本当は「使徒」というのは僕（しもべ）なんです。キリストのおっしゃることにただ、

「はいっ」

と言って、ただ聞いているだけじゃなくて、それを必ず聴従するわけだ。聴き従う。我々の信仰は、信行一如でなかったら、信仰でない。これが本当の「信行」、信じ行ずる。行ずることが即ち証し人であるということです。黙って人のために祈っているのも行ずる世界です。ただ手足を動かすことばっかりじゃない。

パウロは正にその当時の地中海の世界伝道だ。コリント後書11章に書いてある通り、たたみかけていろんな艱難に、あれだけの艱難に遭って突破しているんだから、大した人だな。普通はあれだけ打たれればたいてい死んじゃうです。鞭で打たれると、血が出てくるしね。

さっきも言ったでしょ、「義認」じゃないと。信仰を体受して、義を賜（たまわ）るんです。実力あるキリストの義が我々の中で動き給う。みんな内容は聖霊です。これくらい具体的なことはないんだよな。だから、魂も心も身体も一如になって動いている。一如となって受けとると、一如になって動く。

パウロは律法を大いに実行していると思って自分の義を誇っていた。非常に誇る気持を持っていたんだ、パウロは。今度は逆にキリストを誇ることになったけれども。その自己義認でもって己を義（ただ）しとしていた、他を批判していた。それが、キリストにでっくわしてひっくり返されると、

「実は自分を自ら認めていたことは、これは本当は肉であった」

ということに気がついた。パウロが「肉」というのは、そのことです。自己義認の、己を

主張している角度を全部、「肉」というんです、エゴイズムです。

●火山人

私は『エン・クリスト』40号（１９８９年10月秋季号）に「人は誰しも」という歌（召団讃歌Ａ55　１９８９年８月20日作、中山晋平作曲、白秋の「行こうか戻ろうか」の歌調で）を書いたでしょ。

５、十字架の贖罪に　救はれし我
うちに聖霊の　力あり
さればいかなる　誹謗も迫害も
忍び荷いて　祈りぬく
６、十字架はイザヤ書　五三の預言
聖霊はイザヤ書　三五の現実
これぞキリスト！　この主にいつも
祈り入りてぞ　生き貫かん
８、人は誰しも　世の人よ
つみびとならずや　救済を要する
神の御前に　平伏さざれば
いつか世界は　大破局！

まぁダメだね、日本は、日本の教育は。教育者が、政治家が、本当の魂の世界を持たなかったら。実業家だろうと何だって皆そうです、根底は福音なんです。本当に文化文明の根底です。それを花咲かせるこの驚くべき福音を持たないで、何が文化だ、何が文明だ、何が民主主義だと言いたいわけですよね。あなた方、本当に戦ってくださいよ。一対一の戦いでいいんだ。戦いといったって、ただ喧嘩することじゃないけれども。一対一の伝道をせざるを得ない。

**「福音を宣べ伝えざれば禍なるかな、これ止むを得ざるなり」**

とパウロが言っている。止むに止まれずして、パウロは語っているんで、「かくせざるを得ない」というわけだ。

**「もう止そうと思ったら、骨の中に火のように燃えつくから、神さまの言を語らざるを得ない、自分は神の言に酔っているんだ」**

と、エレミヤが言ったでしょ。

**「わが言は――意味にあらず――霊なり生命なり」**

とキリストはおっしゃった。だから、あなた方一人一人は、烈々たる魂であっていただきたい。女の方であっても、誰でも。おとなしくても結構ですよ。しかし、ひとたび、触れれば火が発するようなことに。日本は火山国じゃないですか。皆、火山人なんだよ、日本

人は。地震なんかあったっていいよ。

## ●イエスの中に在る信によって

律法の義というものが、実は自己義認であって、「肉」であった。「霊」であるということは、或いは霊的であるということは、神中心、キリスト中心、キリスト一切ということです。「霊と肉」とパウロが言っているのは、どんなに理想主義的であっても、人間から発しているものは、それは「肉」なんです。その理想主義の根底に福音をもってくれば、その理想主義は逆に本当の「霊」になる。理想主義をそれ自身悪いと言っているんじゃない。中心なるものが間違っていると言っているわけだ。

浪漫主義であろうと理想主義であろうと、皆それぞれの真理性はありますよ、その真理性を本当に生かすものは福音だということです。ただそれを分析して、これはダメだこれはいいなんて、そんなことを言っているんじゃない。

福音というものは全部を生かす、救い上げる、変質させる力を持っている。だから、何にでっくわしても、絶対にそれによって動かされない。逆にそいつを動かしてしまう。そんな福音なんですよ、我々の福音は。

どういう礼拝の仕方をするとか、どんな信仰箇条であるとか、聖書はどう解釈しなければならないとか、そんなことではないんだ。聖書なんか見ると、矛盾だらけだ。しかし、それは表面の矛盾であって、後ろから見ると、全部本当のダイヤモンドみたいなところから光を発して、それがいろんな輝きになっているような世界ですよね。

人間が間違って書いたものが随分あるよ、聖書の中に。その間違いもちゃんと見える。文字にこだわらない。

「パウロさんも、ここのところはちょっと観念的だな」

と思うところもあるよ。

"SPILITUS SANCTI EST DEUS IN NOVIS"

「聖霊は我々のうちに在るところの神である」

というラテン語ですけれども。"DEUS"「神」の代わりに

"CRISTUS IN NOVIS"

「我々のうちのキリスト」

と言いたいところだね。うちなるキリストは聖霊である。

「[26]**汝らは信仰によりキリスト・イエスに在りて、みな神の子たり。**」（**ガラテヤ３・26**）

これがちょっと、訳がおもしろくない。

「汝らはキリスト・イエスに在る信仰によりて神の子なり」

だ。キリスト・イエスの中に、「エン・クリスト」に在るところの、その信によって神の子

である。

「キリスト・イエスの中にあるところのその信によって神の子である」

ということ。

**1キリストは自由を得させん為に我らを釈き放ちたまえり。然れば堅く立ちて再び奴隷の軛に繋がるな。**

律法の奴隷ということです。

**「キリストは自由を得させん為に我らを釈き放ちたまえり」**

とは、

「キリストは我々を十字架でもって自我から解き放してくださいました。また律法からとき放してくださいました」

ということです、彼らに言わせれば。我々にとっては律法なんてものはあんまり問題じゃないんだけれども、旧約聖書の事態ではそういうこと。

今の教育では、道徳をやらないでしょ。道徳からもとき放される。それから、「社会、社会」なんて社会のことばっかり小さい時からやらされる。そんなことからもとき放されて、社会であろうと、道徳であろうと、福音が来なければみんな本ものにならないというわけだ。そういう自由なんです、この自由というものは。勝手気儘とは大違いだ。

## ●クリスチャンの自由

それで、この自由のことを、このパウロの自由のことを、実によく釈明してくれたのが、マルチン・ルターの『クリスチャンの自由』という本です。これは是非知っていただきたい。

「キリスト者はあらゆるものに対して自由なる主であって、自主なる者であって、何者にも従属しない。」

キリスト者はあらゆる者に対して自主、自由である。何者にも従属しない、あるいは何者にも僕とならない。自主であって僕じゃない、奴隷ではないと。それから、もう一つ。

「キリスト者はあらゆるものに対して、またあらゆる人に対して、仕えるべきところの僕である。」

逆なことを言っている。今度は、奴隷であり、僕であるという。何のことか。これは、パウロのコリント前書9章19節とロマ書13章8節から彼があみだしたところの宣言なんです。

**「19われ凡ての人に対して自主の者なれど、更に多くの人を得んために、自ら凡ての奴隷となれり。」（コリ前書９・19）**

自主であるが、奴隷である。この19節をルターはこの二つの矛盾したような句でもって表現したわけです。それから、ルターは30節ばかりずうっと展開している。

「神―キリスト―我」の縦の関係です。キリストは神に対して、

「あなたの御意をどうぞ成してください、私は聴きます」

と。そして、実際、神の御意を体現した。だから、これを聖意体現という。聖なる意志を身体でもって現じた。だから、キリストは神さまに対して僕なんです。神さまの言うことを、「はい、はい」と聴いて実行しているんだから。聞きっぱなしじゃない。必ず実行している。だから、あの聖言に力があるし、その業（わざ）がすごいというわけです。神さまの力が働いているんだから。

御意といったってね、これは必ず力があるんですよ。神の御意には力がある。意味じゃないんだから。キリストの言もそうです。

「立て！」

といえば、跛者が立ってしまう。

「起きよ！」

と言えば、死人が甦ってしまう。だから、聖書を読んで、特に福音書を読んで、

「参りました！」

と降参しないで、どうしてその世界に入れるかというんだ。

「仕方がないから信じておきましょう」

なんて冗談じゃないよ。降参しなければ、平伏さなければ。

それで、僕の世界は、我々は神・キリストの僕であるから、相手は絶対者だから、何ものにも依存しないわけです。これはその言葉なんです。

「キリスト者は何者にも依存しない自主なる者である」

というのは、僕であるからなんですよ、神さまの僕であるから。神さま抜きの自主じゃない。今の普通の文化人はみな神さまぬきの自主なんだ、自由だとか自主だとか言っているけれども。何が自由で何が自主だと言いたいわけだ。だから、日本の教育はダメなわけなんだ。公立の学校では、キリスト教や仏教はそのまま語るわけにはいかない。そのまま語るわけにいかなくても、語る人がそれをもっていて自在に語ればいいんだよ。何を恐れているか。僕であるから、本当に自主なんです。絶対者の僕であるから、自由なんです。僕であるから、自分を殺してしまっているわけだ。

「我が意志にあらず、汝の意志を」

ということです。

"Our wills are ours to make them thein."

「我々の意志は我々のものであるが、これは貴方のものとせんがためにある」

と。これは、テニソンの『イン・メモリアム』にある有名な句です。

## ●聖霊なる自由

それで、矛盾してるようなこの句が実は本当だということがわかる。あらゆる人の僕になるというのは、今度はこの僕は聖意を頂いている、力を持っている僕なんです。自主な

る力をいただいているんだ。僕にして自主なる者なんだ、クリスチャンというのは。僕だから何でも人のためにやることができる。相手を救う、相手を助ける。これが本当の奉仕というんです。命令されるから、言われるからやっているんじゃない。自ら進んでやらざるを得ない、というわけです。

これが、愛というんです。愛とは人助けをする、人を救うこと。その力は上から来ているんだ。何ものにも依存しない者が、あらゆるものに仕えていく、それを救い上げていく、荷なっていく。荷ないの魂なんです。荷物を背負っているんだ。それが本当の自由だということなんです。パウロは、ここではそこまで言ってませんよ。けれども、後でもちろん言っているところがあります。

「愛の実を結ばない信仰は徒らである」

と。愛に実を結ぶということは、僕として人を助けること、救うこと。感情的に愛するということじゃないですよ。愛するとは、助けることです。

この自由は聖霊がなければ、自由ということは言えない。だから、

「我々を罪から解放して自由を与えるために」

とは、

「この自由なる聖霊を与えるために」

ということなんです。いいですか。自由をただ概念と思ったらダメですよ、観念と思ったら。自由という聖霊なんです。聖霊なる自由なんです。その自由は神さまの活ける法則に従っている。これは、パウロがロマ書8章2節で

「**生命の御霊の法**」

と言った。生命の御霊の法こそは自由で、これは我々を罪と死――そしてサタンと陰府、これは悪の四位一体だ――それから解放し、そいつに打ち勝つことができる。ライオンも狼も豹もなびいちゃう。そういう世界に我々が入れられる。

アウグスティヌスが、

「恩寵の力で行こう」

と言った。ヘラギウスは、

「そうじゃない、我々の自由意志で行こう」

と言った。同じことを今度はルターの時に、エラスムスが「自由意志論」というのを書いた。道徳哲学の世界では、エラスムスの言っている自由意志論は相対的な真理をもっています。けれども、

「本当の魂の世界ではそうじゃないぞ」

と言って、ルターが書いたのが「奴隷意志論」です。

「奴隷意志論は私の極めて大事な本だ」

と、ルター自身が言っている。それはエラスムスに対する、いわゆる文化に対するところの、

文化人の考えに対するところのもので、

「ナイン（否）！　そうじゃない。人文主義じゃダメだ」

と言って――もともとルターは人文主義的なところは通ったですよ――福音に来てしまったわけだな。ルター自身も苦しんだんだよ。これはパウロと違うんです。パウロは魂の苦しみは知らない。「律法の義だ」と言って、大いにいきりたっていた。ところが、ひっくり返されて、

「なるほど、俺はとんでもない霊的な傲慢だった。自分というものがどんなにエゴイズムか」

ということが分かって、そして、ロマ書7章のあの告白が出て来たんです。ルターはロマ書7章的苦しみの中から、十字架・聖霊で8章のところへつき抜けた。

けれども、せっかく『クリスチャンの自由』を書いたんだが、この『クリスチャンの自由』には、聖霊のことの表現が少し足りない。その点、私は残念だと思っている。むしろ『ロマ書の序文』の方がいい。しかし、もちろん内容は非常に聖霊の世界に入ってますよ。ですから、

「神さまの言と自分とが一つになっていることは、ちょうど、本当の夫婦が一体であるのと同じようなぐあいだ」

と。そんな表現をしてみたり、

「火の中に入っている鉄がまっ赤になって、鉄だか火だかわからなくなる。そういう世界が本当の信仰の現実だ」

ということをルターはこの中で言ってますから。決して観念じゃない。もちろん、観念じゃないです、ルターは。でなければ、あんな素晴らしい聖書の翻訳なんかできやしない。その後、いわゆる文法的にはより正確な訳があっても、ルターの訳にかなわないのは、ルターがやはり聖霊の力で訳しているからです。

## ●聖国は来ている

あなた方も、そのうち、ギリシャ語やヘブライ語を大いに勉強して、新しい訳を作ってくださいよ。今度の共同訳は大分良くなっているけれども、まだ足りないね。もっと大胆な訳し方をしなければ。単なる訳じゃないけれども。福音の世界は未来に対しても、「であろう」なんてな世界じゃない。

「必ずそうなる。現に内側ではそうなっている」

という、もの凄い現実です。天国的現実です。だから、いろんな事にでっくわせば逆に聖霊の力が働く。もうあり難くてしょうがない。絶対に行き詰まらない、絶対にへこたれない。力みじゃない。力んで言っているんじゃないですよ、私は。聖霊の力がそういうように働くからしょうがないというわけだ。しょうがない世界だ。

ガラテヤ書5章、

1 **キリストは自由を得させん為に我らを釈き放ちたまえり。然れば堅く立ちて再び奴隷の軛に繋がるな。**

これはまぁ、そういう現実でパウロは言っているんだけれども、

**「堅く立ちて再び奴隷の軛に繋がるな」**

なんてことは、我々にはあまりピンと来ない。けれども、言葉のもうひとつ奥の意味になると、これは大事な言葉なんです。

「この世のいわゆる物質的な物や、あるいはこの世のいろんな文化的なものの奴隷になるな」

というように受けとれば、また大事な言葉ですけれどもね。「堅く立ちて」なんていう表現だと、堅くなっては困るよ。

「解き放してくださったから、大いにその中に入りこんで、そして奴隷の軛なんかかけようたって、かけようがないじゃないか。パウロさん大丈夫だよ」

というくらいな気持で読んでください。かしこまって読んでたってダメだよ。

5 **我らは御霊により、信仰により希望をいだき、義とせられることを待てるなり。**

さぁ困ったね、これは。

**「我らは御霊により信仰により」**

この言い方はいいですよ。御霊が先になっている。聖霊が来なければ、信仰はないんだから。御霊でもって、御霊が臨んで来たんで、もう信ぜざるを得ない世界に入った。だから、「信仰において」と。

**「恩恵により信仰によりて」**

という言い方もエペソ書の中にある。「恩恵と平安」。恩恵は十字架。十字架の恵み。平安は聖霊。聖霊は力があるから、何が来ても、本当に平安です。

**「我らは御霊により、信仰によって**

キリストを信受したことによって、

**希望をいだき」**

と。希望といったって、これも上から来るんです。こっちから希望するんじゃない。それは願望なんだ。希望というのは、

「必ず天国は、神さまの国は来るぞ、新天新地は来るぞ」

と、上から宣言されて、黙示録で預言されている。旧約のイザヤ書であろうと、ホセア書であろうと、旧約の預言者たちは、「末の日、かの日、あの日」という言い方をして、終末の日を預言している。これはみんな示されているところの希望なんです。天国は、

**「聖国をきたらせ給え」**

とキリストの祈の中にもある。本当は、聖国は来ている。

「聖国は来ているから、どうぞまた本当に来てください」

と。これが、あの「聖国をきたらせ給え」の祈りの本当の意味です。

あなた方がバトンタッチして、段々と――何も数は要らない――本ものをジリジリとつくってくださいよね。つくらせられる。大集会なんか要らん。キリストの弟子でさえ、何千人キリストは救ったか知れないけれども、残ったのはたった4、5人だ。それが新約聖書になった。大変なことだ。ペンテコステでもひっくり返ったのは随分いる。けれども、本当にそいつを身につけたのはやっぱり少ない。だから、キルケゴールは、

「本当のクリスチャンは天才よりも少ない」

と言った。さすがはキルケゴールだ。けれども、あなた方は本ものになってくださいよ。無条件に本ものになれるんだから。一番素晴らしいものは無条件の世界だから。

「どれだけのことができなければ福音はわかりません」

なんて、そんな世界じゃない。

「それはまぁ、小池先生だからそういうところにも行ったでしょうが」

なんて、そうじゃないんだよな。誰でもが行ける、入れる。私はバカだから。みんな利口すぎる、私みたいにバカにならなければ。大馬鹿三太郎だ。

だから、私はときどき「天童」と書く。私は偉大な人間じゃないけれども、偉大な人物、本当に魂の偉大な人物は童心を持っている。策略を持たない。リンカーンにしろ、グラッドストーンにしろ、ビスマルクにしろ、本当に童心をもっている。それから大詩人、大科学者、みんなそうです。アインシュタインもそうです。童心ということは、いつわりのない、あけっぱなしの心。本当の八方破れは、切り込んでいくことができないんだ。

**「信仰により希望をいだき、義とせられることを待てるなり」**

と。何をパウロはそんなことを言っているのか。この場合の「義とせられる」というのは、現実に本当に義人となること。それはもう天国だよ。地上ではその義の世界に入れない。「賜りたる義」の世界だ。けれども、それが本当に身について――そりゃ、地上でもある程度は身につかなくちゃダメだけれどもさ――その「義とせられるのを待てるなり」と。ま、そこまでパウロは打ち込んで、この「義とせられるのを待てるなり」と言ったか、そいつはちょっと別問題だけれどもね。

「義の完成を待てるなり」

ということです。全き義を、義の完成を待てるなり。地上では三日月だよ。ただし、その三日月は本ものでなければダメだ、上弦の月でなければ。

## ●信愛一如

パウロは、さっき申し上げた通り、もう御霊の力が来てしょうがない。

と。

「16**われ福音を宣伝(のべつた)うとも誇るべき所なし。已むを得ざるなり。もし福音を宣伝えずば、我は禍害(わざわい)なるかな。」（コリント前９・16）**

と。

6**キリスト・イエスに在りては割礼を受くるも割礼を受けぬも益なく、ただ愛に由りてはたらく信仰のみ益あり。**

「益あり」というのは「役に立つ」ということですよ。いわゆる「洗礼」は、洗礼を受けるも受けないも、そんなことは問題じゃない。受けたければ、受けたっていいよ。ただし、

「本当の聖霊のバプテスマを受けよ」

と。洗礼のヨハネが言った通りです。

**「私の後から来る人は――私はその靴の紐を解くにも価しないが――この人は大変な人だ、これは御霊と火でバプテスマする人なんだ」**

と。それは、地上ではキリストはやらなかったよ、十字架にかかるまでは。十字架に懸かってから、上から、今度は聖霊をくだした。

「お父さんにお願いして、あなた方に御霊を降すから待っていろ」

と。その聖霊がくだって、聖霊のバプテスマを私は阿蘇で受けたんだから。

**「ただ愛に由りてはたらく信仰のみ益あり」**

ここのところは、二段構えにパウロは言っているけれども、本当の信は愛に働かざるを得ないんです。信愛一如です。二段構えの分析的な判断はダメ。

「そうですか、なかなか私は愛せませんが」

なんて、そうじゃないんだよ。

「聖霊の最初の名前は愛である」

とトマス・アクィナスが言った通り、御霊の実質は愛なんだから。

「十字架で罪から解放してやった。しかし、まだからっぽだよ。解放はされても、まだ力がない。お前たちに力をやる、生命をやるよ」

というのがこの聖霊なんだから。それだから、十字架だけじゃダメです。「十字架、十字架」と言っている信仰じゃダメなんだ。

ところが、このパウロはガラテヤ書で「信仰のみ」と言って、烈しく戦っている。「行為(おこない)じゃない」と。行為とは、律法の行為のことを言っているんだけれども。

「お前たちは律法の行為のことばっかり考えているが、そうじゃない、私はもう大間違いしてきたから言うけれども。キリストを受けとれ、キリストを受けとれ」

と。これが「信仰のみ、信仰のみ」ということです。

マルチン・ルターもそれで宗教改革をやった。カトリックは一生懸命で行為のことを問題にしているから、そうじゃないんだと。ルターは修道僧として一生懸命で勤行(ごんぎょう)したけれども、ちっとも心に平安が来ない。苦しくてしょうがない。見たところ立派な模範的な修

道僧なんだ。勤行はちゃんとするし。しかし、ダメなんです。何か苦しい。とうとう独房でぶっ倒れてしまった。

「もう少し放っておけば、自分はもう骨になるところだった」

と、はっきり告白している。

「おかしいな、ルターのやつは独房から出てこない」

と、戸を蹴破って入ったんですから、他の坊さんが。そうしたら、苦しみでまっ青になってぶっ倒れていた。

「神の前に自分は義となることができない」

と。それで、あのスタウピッツに、

「キリストの十字架を見なさい、あれはお前のための十字架なんだよ」

と言われて、それでびっくりした。

「あの十字架は二千年前の十字架じゃなかった。今、私のために懸かっている十字架であった」

ということに気がついた。それで、預言者たちが言っているように、

「もう贖ったじゃないか。何を考えているか、無条件で受けとれ」

と。

「はいっ！」

と、全身で「はいっ」と言うんですよ。口で「はい」と言うんじゃない。

「はいっ、参りました！　有り難うございます！」

と全存在で全部受けとる。そうしたら、グワーッと来るから、上から御霊が。何か知らんが、光が、力が入って来る。これが聖霊の世界です。

だから、十字架を本当に受けとりなさい。必ず聖霊は来ます。それをやらないんだよな。本当に祈り入らないから。ぶっ倒れないから。祈入しないから。あるがまま自分をキリストの中に投げ入れないから。体裁をつくっているから。

体裁じゃないんだ、信仰は。それだから、あなた方は、私がこうやって告白しているのを、全存在で聴いていれば、力が来たでしょ。

「何か調子がわるかったけれども、治ってしまった」

なんていう、そういう世界です。

## ●信仰は愛に動かざるを得ない

### 「ただ愛に由りてはたらく信仰のみ益なり」

「愛に由りてはたらく信仰」じゃない、

「信仰を持てば愛に働くぞ」

と言ってもらいたいんだ、パウロに。「愛にはたらく信仰のみ益あり」と言うと、

「信仰はあったけれど、愛に働くにはどうしたらいいでしょうか」
なんて、普通そう考えるよ、二段構えで。ダメだよ、それじゃ。
「信仰は愛に働かざるを得ない」
と。これはパウロが、
「御霊の信仰はかくのごとく動かざるを得ないんだ」
ということをパウロ自身も別なところで言っているわけだ。止むに止まれずして動くのが、全部本ものです。だから、
「本当の信仰ならば、愛に働かざるを得ない」
こう読めば、ここはもうおしまい、何も解説する必要はない。

**「愛にはたらく信仰のみ益あり」**

と、何を言っているか、パウロは。そういうもの凄い、深く入った、深い静まった世界なんです。その静まった世界にもの凄い動を持っている。動に爆発せざるを得ない。静動一如の世界なんです、我々の信仰の世界は。ジッとしているけれども、いつそれが爆発して動き出すかわからない。
「愛に働かない信仰はいつわりだ。そんなものは本当の信仰じゃないぞ」
と言ってもいいんです、逆に言うと今度は。
私は無教会でそういうのを教わらなかった。観念的に
「信仰のみ、信仰のみ」
と、気休めになっている。しかし、まぁ、内村鑑三、藤井武、塚本虎二という先生方はそれぞれよくなさいました、働きもなさいました。けれども、把握の仕方にまだちょっと手前のところがある。義が強すぎた。本当に愛の溶け込んでいる義でなかった。これは無教会の欠点だ。だから人を審く。「真実でない」なんて言う。
「人間は偽りだ。神さまだけだ」
と、パウロもエレミヤも言っている。
「心は偽るものにして…」
と。我々の心の中をもしさらけだしたら、どんなにドラマチックなものになるかわからんくらいにいろんなものが渦まいているね。けれども、そんな渦巻きはもう気にならなくなってしまった。人間の感情というものはしょうがないもんだ。この福音の力ですぐそんなものは消えてしまう。だから『人は誰しも』（召団讃歌Ａ55）という詩を私は書いたでしょ。あの詩は、
「お互いに本当に思い遣りなさい、赦しなさい」
と、それを私は自分で歌っているんだ。「行こうか戻ろうか」の曲（中山晋平作曲）のあの歌は面白いから。
「愛に動かざるを得ないのが、本当の信仰である」

と。いいですね。

「信仰は動かざるを得ないものである。極めて我々の信仰は動的なものである」

ということをはっきり受けとっていただきたい。

「よし、私は、今年は一人の人をひっくり返してやるぞ。神さま、そういう人にぶつからしてください」

というくらいの気持で祈って、或る一人の人を本当に助けてくださいよ。それが本当の伝道だから。それをやらないで、ただいい気になっていたら、これは信仰そのものが本ものでない。パウロよりか烈しいですよ、私の言うことは。もう溢れてしょうがないですよ、これは。だから、

「私はキリストに圧倒されながら生きているんですよ」

と言う。どうせ破れ器だよ、私は。けれども、これは整った器よりももの凄い天器なんだ、天の器なんだ。自分を言っているんじゃない。人間的な整いなんて、たかが知れています。もうこれ以上破れ切れないんだ、私は。破れ切っている人間だから、八方破れだから。

「それじゃ、お前はでたらめか」

と。ところが、でたらめじゃない。法則がちゃんと働き給う。有難いです。いわゆる道徳家よりかもっと凄い道徳の世界を歩くことができる。

「あれはクリスチャンのくせにしょうがないな」

と思うことがあるよな、他人のことを。批判はしません。まぁ、説明できないです、この世界は。

## ●宇宙を翔け回るような魂

「二つなき心を君にとどめおき我さえ我に別れぬるかな」

キリストに対する一つの心を君にとどめおきて我さえ我に別れぬるかなという。

「自分はありませんよ。あなたの中に隠れてしまいました。あなたの中に消えてしまいました」

というわけだ。

「写真をとったが、小池先生は映らなかった」

と。それが本当の世界。どうも映っていかんね、まだ（笑）。まだ映って困る。

「木喰（もくじき）の袈裟や衣は破れてもまだ本願は破れざりけり」

キリストの本願は絶対に破れないです。

「仏法に善きも悪しきも隔てなしわが本願に洩（も）らすものなし」

全部福音にあてはまる。

「キリスト道に善きも悪しきも隔てなし、わが本願には、キリストの本願には洩らすものなし」

というわけです。

**「善きものにも悪しき者にも、太陽は照らし、雨を降らせる。その如くお前たちも全かれ」**

というのは、そのような凄い愛の中に入れということ。キリストは水を割らずに仰るからね、

「お前たちこれくらいならできるか」

なんて言いやしない。できないことを片っ端からつきつけている。

「お前は私の中に入れば、これができるぞ」

と、これが福音なんです。不可能を、我々の生まれつき不可能の我々に可能にする。

ナポレオンじゃないけれども――ナポレオンのやつは大分力んで言っているけれども――最後にセントヘレナでキリストに参った。福音書を読んで、

「これは本じゃなかった、生き物だった」

と。このナザレのイエス・キリストは大変な方です。お釈迦さんなんかとてもかなわない、キリストには。お釈迦さんを私は尊敬してますよ、けれどもキリストは桁違いです。それにあなた方は、私たちは無条件に救われたんじゃないですか、何が要るんですか。宇宙を翔け回るような魂になっているんだ。

どこかに、パウロが、

「私をお前たちはまるでキリストを迎えたようにしてくれたね」

なんていう言葉があったね。さすがにパウロはキリストで光っていたね。愉快な言葉だ。

14**それ律法の全体は『おのれの如く、なんじの隣りを愛すべし』との一言にて全うせらるるなり。**

だから、

「互いに相愛せよ」

ということを言っている。自分を愛することは、自愛ということは人間の本能だから、それからエゴイズムになるんだけれども、そいつを、その強さを隣人の方へもっていけ、というわけだ。己の如く――己を愛することが止むにやまれないような衝動だけれども――その第二の衝動として汝の隣りを愛する。

「本当に愛すれば、己なんか問題でなくなるぞ」

と。

**「己を憎まずば、我が弟子となることができない」**

というのがキリストの聖言でした。

「こんなもの何になるか」

と自分を吐き捨てるようにしていくと、キリストが入ってくださる。それが聖霊の驚くべき生命です。

●円還関係

こないだ、裾野でヨハネ伝のことをしゃべって、今度は『エン・クリスト』40号（１９８９年10月秋季号「使徒ヨハネの本質（其一）」）にその前半を書きましたが、あれは「生命」です。生命の質は愛だということ。後半は「愛」で、今度は41号（１９９０年1月冬季号「使徒ヨハネの本質（其二）」）には愛のことが出て来る。極まるところは結局愛になるんです。コリント前書13章のように。

15 **心せよ、もし互いに咬み食わば相共に亡されん。**

その通り。ソ連とアメリカがもし戦争をやれば、相共に亡びて、世界はひっくり返る。

贖罪の行為は――キリストの贖罪は私たちを罪から解放してくれた――自由の、からっぽの現実ですが、今度は、キリストの聖霊は、この生命と愛の現実に私たちを入れてくださった。だから、聖霊がなかったらどうにもならん。「聖霊」なんて言わなくたっていいよ。活けるキリストが内に入ってくださらなかったらどうにもならん。

仏教の言でいうと、「往相廻向」、これが信仰の現実です。「還相廻向」、これが愛の現実です。キリストの中に入って往く、これが往相だ。それから、キリストから今度は出てきて、降りて来て、そして隣人を愛する、これが還相。廻向とは廻り向くと書くね。往くも還るも同じこと。そして、預言者たちは「往く」ことをまた

**「帰れ、帰れ」**

と言っている。要するに往くも帰るも同じ事、グルグル廻るんだ。円還関係です。それからまた昇ってゆく。それからまた降りて来る。それをしょっちゅうやっている。これをしょっちゅうやらなければダメです。ああいう円還関係になっているのが本当の世界です。

そういうことをルターが『クリスチャンの自由』の最後の30節で言っているから、それをちょっと読んでおきましょうね。

「『キリスト者は信仰によって己をたち超えて、神の中に入って往く。また彼は愛によって、神から己の下の方に降りて来る。しかも常に、神の愛の中に留まっている。正にキリストが言いたもうたように、即ちヨハネ伝1章15節、天開けて人の子の上に天使たちの昇り下りするのを汝ら見るべし。視よ、これこそはあらゆる罪、律法、誡命から心を自由にする義しい霊的なキリスト者の自由であって、この自由は天の地を越えているが如くに、あらゆる他の自由に優るものである』

このようなルターの表現を読むと、それは恰も天然現象にも似ている思いがする。即ち、水は天から降り注ぎ、地に浸透し、地下水となり、源泉として噴出し、激流となり、滝と落下し、川と流れ、原野を潤し、人里に不可欠の恩沢を与え、大海に流れ入り、再び大空に上昇して、天地間を還流して、その姿は生命的な自由であり、愛であり、喜びである。水は聖書においてしばしば聖霊に例えられている。ヨハネ福音書第４章において云々。」（著作集第七巻『聖書の人ルター』404～405頁）

というような具合に、正にこれは水の転回と同じだ。そして、また流れて、いろんな回りを潤しながら流れていく。この潤すのが愛の世界だからね。

## ●イエスの印

ガラテヤ書6章、

3 **人もし有ること無くして自ら有りとせば、是みずから欺(あざむ)くなり。**

この場合の「有ること無くして」とは、

「本当に実存していないで」

という意味なんだけれども、本来は無一物なんだよな。本来は無一物。

「有るけれども、そんなものが有ると思うことが実は間違いなんだ」

と、パウロの言葉を逆に使えばそういうことになる。

8 **己が肉のために播く者は肉によりて滅亡(ほろび)を刈りとり、御霊のために播く者は御霊によりて永遠の生命を刈りとらん。**

この言い方もちょっと面白くない。

「己が肉のために、肉にありて肉のために播く者は亡びる。御霊にあって御霊のために播く者は永遠の生命である」

と、本当はそういう意味です。言葉の使い方は、訳はそれで仕方ないけれどもね。「肉にある」というのは、生まれつきの自我、我、それは亡びる。しかし、「聖霊にある」第二の我、新しく生まれた我、それは必ず永遠の生命を刈りとる。だから、我々は死んでも死なない。戦いでいつも御霊の方が最後には勝ってくださる。転んでも躓いても、御霊の力で必ず起き上がる。「のために」とは、「それを期して」というような気持です。

「御霊の中へ（エイス・ト・プネウマ）と播く者は」

という言い方になっている。「のために」とは「の中へ」ということ。「エイス」というのは目的的な「ために」という訳になっているわけです。

16 **此の法に循(したが)いて歩む凡ての者の上に、神のイスラエルの上に、平安と憐憫(あわれみ)あれ。**

「神のイスラエル」というのは、今までのイスラエルではない。御霊にあるところの、キリストに救われたところのイスラエルです。我々は神のイスラエルです。

17 **今よりのち誰も我を煩(わずら)わすな、我はイエスの印を身に佩(お)びたるなり。**

「イエスの印」とは十字架の印です。それから、キリストのためにいろんな傷を負っている、これがイエスの印、福音の印です。

「聖名(みな)のため受けし傷あと持たずして御前(みまえ)にいづる恥知るや君」

という、ある人の歌がある。

「私はそんな傷を受けないで、次の世界に行きたくはない。さんざん傷を受けて、

聖名のためには傷を受けて行きます。そうでなかったら、御前に出られません。

十字架に懸かったキリストの前には、我らもまた十字架を負って行きましょう」と。

**「己が十字架を負いて我に従え」**

という。この世でただ

「めでたし、めでたし」

なんてのじゃダメだ。いわゆる「お幸せ」なんてのじゃダメだ。ちっとも幸せじゃない。本当の幸せはキリストの聖霊を持っていることです。

「その人のところへ行くと、なんだか知らないけれども、暖められ力付けられて帰って来ます」

という、そういう存在だね。パウロは、

「この印を佩びたから、もう煩わさないでくれ」

と。それはもう本当にパウロとしてはやり切れないからこういうことを言ったのでしょう。

「もう、そんな今までのユダヤ教でゴタゴタするな。もっと本当にこの喜びの世界に入れ」

と、こういうわけだ。

私はドイツから鉄製の十字架形の勲章（１９８０年3月1日西ドイツ政府から第一級功労十字章授与）みたいなものを貰ったけれども、それだけは一級品だから。びっくりしたんだ私は、こんなものを貰うことはないと思ったのに。それだけは頂きました、大使館に呼ばれたから。けれども、日本の勲章、第何級とかいうのをくれるというのを、私は要りませんと断った。もうドイツのあれだけでたくさんだ。

しかし、あの十字架も、キリストから賜るところの十字架の印が、これが大事なんだ。その印として、まぁちょっと付けたけれども、しょっちゅう付けているわけじゃない、もちろん。これは、キリストから賜るべき十字架の印として、頂きました。皆さんも、キリストから賜る十字章を額につけて歩いていてくださいよ。そうしたならば、いくら煩わされても、大丈夫ですから。いよいよその見えざる十字章は光る。

私は有難いね、いろんな敵がいるから逆に強くされたから。退け者にされて、アウトサイダーにされた。ひとつも力んでいるわけじゃない。「孤軍万軍」といって天の万軍が味方だから。皆さんも、この召団はそのような一人一人であっていただきたい。そうしたらば、私が向こう側に往こうが、この召団は絶対に亡びないです。在り方はどうでも結構です。集会のやり方はどうでもいい。どうぞ、

「魂の世界で、祈の世界で連なっています、誰がこれを破ることができるか」

と、はっきり言えるところのあなた方一人一人であっていただきたい。

おわります。